



エコツーリズム大賞特別賞  
受賞の「森の国」社長

# 伊沢 大介さん



いざわ・だいすけ 大山町出身。慶応大卒業後、世界最大の経営コンサルティング会社「アクセンチュア」に入社。大型テーマパークの業務手法の改善に携わった。「徹夜で作った資料を目の前で破った上司の夢を今も見ると笑う。父が創業した森の国に2003年に入社し、07年から社長を務める。趣味は読書で、英国作家のミステリーを愛読する。大山町赤松。

を振ってくれるような関係があってこそ、エコツーリズムと言えぬ」  
— 都市部や海外から来た体験者には新鮮でしょうね。  
「田んぼがどう管理されているのかや、苦勞や喜びを農家から聞く。時には『(作業を)やってみるかね』と声をかけてもらうし、収穫したネギをいただくこともある。サブライズ(驚き)の連続で、『ハーフトフルで良かった。大山を好きになった』と言われる」

「農村という閉鎖的なイメージもあります。胸襟を開きながらお願いすれば、はにかみながらも、こたえてくれるのが鳥取の人だ」  
— 住民が地域の魅力に気づいていないことが往々にしてあります。

「(アウトドア用品大手の)モンベルの辰野勇会長も大山を高く評価している。でも、外の人が『いいね』と言っているだけで、地元が良さを分らないことがある。それが、体験者の喜ぶさまを実際に見ると、『どうやらすごい暮らしをしているみたいだわ、お父さん』となる。おいしい水と空気と食べ物をはぐくむ大山の素晴らしさ、豊かさに気づいて、郷土愛、誇りを持ってもらえる」

## 地域挙げ大山の魅力発信

ありのままの自然や地域の暮らしぶりを体験する観光「エコツーリズム」を大山で展開する「森の国」(大山町赤松)が、「第10回エコツーリズム大賞」(環境省など主催)の特別賞を受賞した。農家などと協力関係を築いて、地域全体で体験者を迎え入れる態勢を築いた点が評価された。伊沢大介社長(41)は「自然や暮らしそのものを訴えて地域のファンを生み出すエコツーリズムは、地方創生のきっかけになる」と、新たな観光形式が切り開く可能性を確信している。

の協力があってこそ成り立つ。『チーム大山』が受賞したのだと考えている」  
— 大山から日本海まで自転車で下るダウンヒルを自転車で下るダウンヒルを「宮崎駿のアニメの世界に迷い込んだような風景の中を鳥のさえずりを聞きながら走る。25キロのコースに

「固定資産税の減免や税金による補助での工場誘致など異なり、エコツーリズムは暮らしそのものを訴えて、ファンを生み出していく。特別なお金を使わなくても良い。地域のオリジナリティーを生かして人を呼び込むエコツーリズムは地方創生のきっかけにもなると思う」  
— これからは何に取り組みみますか。

(米子総局報道部・陰山篤志)

「全国57団体が応募する中、大賞、優秀賞に次ぐ、特別賞を受けました。」「エコツーリズムは地域

「体験プログラムを充実させていく。地域との連携もさらに深めて、地域が一体となって大山の魅力を発信していきたい。知恵とノウハウで大山と鳥取を盛り上げ、笑顔と歓声にあふれる地域をつくりたい」

「エコツーリズムは地域

「ダウンヒルでは、農家

「ダウンヒルでは、農家